

京都グローバルゼーション研究所通信

第1号 2006年9月

京都グローバルゼーション研究所

Kyoto Institute on Globalization (KIOG)

主宰 佐々木 建

〒603-8151 京都市北区小山下総町 37

TEL:075-451-8303 FAX:075-451-3682

E-Mail:kitanihito@aol.com

<http://www.focusglobal.org/>

<http://www.focusglobal.org/kitanihito/>



目次

時代の課題

CHINDIA (チンディア) 登場について考える

京都グローバルゼーション研究所の設立にあたって

ウェブサイト Focus on Globalization - 地球の視野で考える - 開設にあたって

評論

ベルトルト・ブレヒト『ガリレイの生涯』讀

書評・紹介

自著を語る

F・シュミット=ブレイク / 佐々木建編、花房恵子訳『エコリユックサク - 環境負荷を示すもう一つの「重さ」 - 』

短信

時代の課題

CHINDIA (チンディア) 登場について考える

CHINDIA (チンディア) という用語が目につくようになった。近年急速に経済成長する中国 (China) とインド (India) の二大人口大国を表現する新造語である。ブラジル、ロシア、インド、中国を総称する BRICs という用語もあるが、どちらかといえば今後の世界経済に占める潜勢力の表現であるのに対し、チンディアは先進世界に対する差し迫った脅威を表現しているように思われる。

低賃金を基礎にしたこれらの国の製造業、IT 産業の競争力に対抗するのは先進国にとって至難の業であろう。生活水準の引き下げと社会国家的成果の集積を大胆に削減することが抵抗によって不可能であるとすれば、資源節約型、知識集約型産業構造への転換を目指す以外に方策はない。さらに、地球環境破壊、資源浪費を促進する工業的発展を抑制するための国際協定の制定や、地球環境保全の視点からの自由貿易協定の見直しも必要であろう。そのような努力が先進国のイニシアチブで展開されなければ、諸国間の平和共存も地球の未来もありえない。

日本では「改革」と称して政府は社会国家的成果を公然と破壊し、「格差」拡大を是認してはばからない。それによって先進国に類を見ない醜悪な階層社会を作り上げつつある。「人身売買」による外国人に対する労働強制、「研修」に名を借りた外国人の搾取を放置し、膨大なパートタイム、派遣、請負による就業形態は拡大するばかりである。かつて山田盛太郎は、1934年に著した『日本資本主義分析』において、日本資本主義成立期における基幹産業発展の基礎を「インド以下の労働賃銀」と非人間的な労働条件に求めた。その「インド以下の」関係がチンディアとの競争下で再生されつつあるとは、なんという皮肉であろうか。不安定就労階層の賃金水準が統計で見てもインド以下であると主張しているのではない。私はそれにも似た苛烈な搾取が基底にある資本主義の再生として告発しているのである。

あえて言えば、そのような非人間的水準に対する労働者の無抵抗も、「再チャレンジ」などというおよそ日本語になじまないスローガンに吸い寄せられ包摂されるふがいなさも、「インド以下」ではないのか。インドには抵抗する強固な意志を持った勢力が存在し。それを支える知性も存在するからだ。

苛烈な搾取によって再生をはかる日本的対応に未来がないことは遠からず証明されるであろう。

京都グローバリゼーション研究所設立にあたって

Focus on Globalization - 地球の視野で考える - を立ち上げてから3年あまりが経過した。ウェブサイトを手がかりに志を同じくする人たちとのネットワークを広げ、交流の場をつくりたいと願った私の当初の思いは、残念ながらまだ十分には実現されていない。大学教育の多忙さにかまけて努力を怠ったことにも原因があるが、この間の体験から学んだこともある。わたし自身もそうなのだが、ウェブサイトのページを書物を読むようには熟読はできないし、共鳴した箇所に鉛筆で書き込むこともできない。成果や考え方を「情報」として提供はできても、それを媒介にして生まれる響きあいは微々たるものだ。あらためて印刷した活字の意味を問い直す機会にもなったのである。

そのようなことから、印刷物と組合せて成果を普及することを願い、京都グローバリゼーション研究所、Kyoto Institute on Globalization (KIOG)を設立することにした。成果はこれまでと同じように、というよりもこれまで以上にウェブサイトに「情報」として発信されるが、KIOG ワーキングペーパー、研究所通信等によって成果の普及に努めるつもりである。たった一枚のプリントでも紙礫として役に立つ。それらが集合すれば、世を切り開く力になる。そうなることを強く念じたい。

「グローバリゼーション」という表現はすでに古びてしまい、無内容にも見える。しかし、グローバル資本主義の無制約の発展がもたらす過酷な現実の諸相、急速に進む地球環境破壊に直面して私たちはこの時代を直截に表現できる概念をいまだに発見できないで苦闘している。ましてやその全体像の解明となると、絶望的な状況である。多くの人びとが地球の視野に立つ運動の展開を求めているのに、その理論支柱を作り上げようとする意志も論議も微弱である。ただ言葉だけが弄ばれるにすぎない状況がいまだに続いている。

例を一つあげよう。「格差」社会について論議が盛んになっている。「格差」とは何か、その解消のためにどのような方策があるのかについての論議が展開されているとは思えないし、ましてやその論議を通じて、グローバル資本主義のもとで貧困と無権利の階層が拡大している現実に肉薄しているとは思われない。これが、研修生という低賃金・無権利の「外国人労働者」雇用の定着、人身売買にも匹敵する暗黒街の雇用・労働実態を底辺にする構造に肉薄する概念といえるのか。ましてや第三世界の人々の絶望的なまでの貧困差の拡大に言及する人は少ない。そこにこそグローバル資本主義が作り出す収奪の最も重要な源泉があるというのである。この現状を見ると、「発展途上」国という表現は空虚である。というよりも虚偽の表現であるとしか言いようがない。その表現に体现される現実の重み、理論の重みを担った態度が必要ではないか。

時代にふさわしい表現の獲得に努めるのは、歴史的転換期に生きるものの責務である。「グローバル化」という一見すると曖昧な表現でもまだ時代を切り取れると、私は考えたい。「資本主義」あるいは「帝国主義」という表現でも、その定義は人によって実に多様であるのに、その構造を具体的に、批判的に解明する多くの学者たちの努力によってこの時代の個性を見事に切り取ってきたのではないか。「グローバル化」についても同じことが言えるだろう。この表現に総括される構造の批判的視点からの解明にいくらかでも貢献して、付託された責任に答えたいと思う。

2006年4月

ウェブサイト Focus on Globalization - 地球の視野で考える - 開設にあたって

現代資本主義の支配は地球大の規模に拡大し、グローバル資本主義ともいえるべき新局面を迎えている。グローバル化とプリバタイゼーションを旗印とする市場経済の奔流は、人類の歴史が育んできたエコロジック、人間的共生の価値体系、さらには人類近代が作り上げた社会的公正と連帯の価値体系を破壊し尽くさんばかりの勢いで進んでいる。この局面が人類すべてに日々の豊かさと平和をもたらすものではないことはすでに明らかだ。人類の営みの営みの理念的、制度的達成物を現代に照らして再確認し、あらためて批判的、対立的価値体系を確立することが切に求められているといえよう。

地球の視野で考えることは、大学研究者や知識人にとっては本来自明のことであった。ところが今では、アカデミズムは産官学共同の卑俗な実益主義に絡め取られ、偏狭で浅薄なナショナリズムを意識的にせよ無意識的にせよ掲げた「知」が横行している。真の意味でのグローバルな価値は、かつて社会主義が強要し、今は市場主義的開発が強要するような教義によって実現されることはない。多様な文化が保持する価値の多様性を認め合い、先進対発展途上のドグマを排して相互に学び合うことによってはじめて実現されるのではないか。

21世紀は、地球環境危機が進み、稀少になる資源の独占をめぐる増大する人口との不均衡が拡大する。今のまま進むなら戦争と動乱の世紀になることは疑いない。「正義」の名による恫喝が日常化し、「正義」を主張しながら資源に対する飽くなき欲望を隠そうともしない潮流が支配的になっている現代に生きて、社会科学はあらためてこの世界史の激動に真撃に対応することが求められている。「考える」よりも「行動する」ことだとの批判を受けることは十分に承知している。しかし、考え抜くことこそが、科学者や知識人の最も重要な行動形態である。軽率な行動によってファシズムや軍国主義に絡め取られていった歴史的体験も想起されなければならない。「地球の視野で考える」とした理由もそこにある。

情報技術の発展によって新しい発信と交流の可能性が生まれている。紙と書物の力、直接対話の力を否定するものではないが、その可能性に新しい連帯の輪を確立を賭けてみたい。このホームページは、主宰者の仕事の公開から開始されるが、これを機に現代の対立的、批判的価値のあり方を真撃に追求する自由な人びとの新しいネットワークが発展すること切に望む。

2003年2月

佐々木 建

評論

ベルトルト・ブレヒト『ガリレイの生涯』讀

NHKの人気番組「その時歴史が動いた」がガリレオ・ガリレイを取り上げた。なぜいまNHKがガリレイを取り上げるのか。期待して見たのだが、失望させられた。ガリレイに対するローマ法王庁の決定は3世紀半を経てようやく取り消され、彼の名誉は回復された。それだけに新資料が公開され、彼が観察によって経験的に獲得した真理を「撤回」させられた審問の過程や幽閉の時代について真実が明らかにされることを期待したが、叶わなかった。科学者個人の転向とその内面的葛藤が示されることを期待したのだが、相も変わらぬ宗教と科学の対立図式で説明していたように思う。宗教をローマ法王庁が、科学をガリレイが代表する図式である。科学の発展を後退させ、後世の動向にこれほどまでの深刻な影響を及ぼした事件の取材としては、迫力に欠けていた。

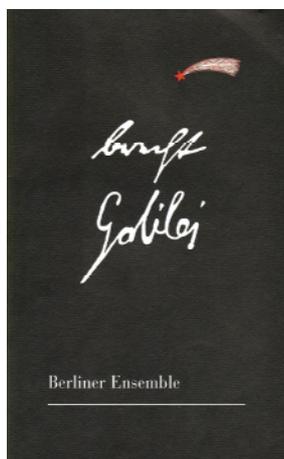
なぜいま私はガリレイに関心を持つのか。研究者はいまかつてない深刻な状況に置かれている。現代には異端審問官も宗教裁判もないし、その学説によって肉体的に抹殺されたり、抹殺の脅迫を受けるたりすることもない。権利と自由が保障されている国に限ってのことであることはもちろんだが。しかし、9・11以降、研究の自由をめぐる状況は激変した。「テロリスト」や「ならず者国家」を攻撃する態度表明が踏み絵とされ、金縛りにでもあったように多くの人びとが沈黙を強いられている。産官学協同や民営化は自明のこととされ、利益を生まない研究は窒息状態に追いやられている。日本では最近の歴史の歪曲の度が過ぎた歴史認識と国益主義の横行によって加速し、研究者の間では魂を売ることを恥じない風潮が横行している。研究に自由に関わって「魂」があると前提してのことだが。「魂」のない人びとには、私のこの議論ははじめから無用で意味のないことだ。

ガリレイの屈服は、現代科学の状況の原点ではないのか。現代の状況を解く重要な鍵となるのではないか。それ以上に科学者のあり方を考える鍵となるのではないか。

現代科学の先駆者としてのガリレイの屈服と人間的苦悩について私が考えるきっかけとなったのは、ベルトルト・ブレヒトの代表作『ガリレイの生涯』に触発されたことであった。この作品は1938/39年に彼の亡命先のデンマークで書き上げられた。

この作品には時代変革への思い、ドイツの政治状況、原爆開発に対する科学者の協力に対する批判やほのめかしがちりばめられ、そのことがこの戯曲に対する過ぎた政治的理解を生み出してきたように思われる。プレヒトのこの芝居を観たのは、記憶はあいまいなのだが、大学院生の頃ではなかったか。俳優座の公演だったと思う。私のその頃の学問認識や政治姿勢を反映してか、ガリレイが法王庁に召喚され、屈服して地動説を撤回する過程ばかりが印象に残り、科学者に対する権力の圧迫の象徴的事件として、私は理解していた。ガリレイの屈服は真理をまもるための偽装であり、彼は私にとって讃えられるべき英雄であった。

1998年、プレヒトの生誕100年の記念の年、ベルリンでベルリーナーアンサンブルによる上演を観た。ソ連・東欧社会主義の崩壊もあって政治主義的理解は影を潜めていた。観劇を機にあらためて読み直してみても、完全に読み違えていたことに気がついた。強く印象づけられたのは、そこにあざやかに科学者がたどる生涯が典型として示されていたことだ。まぶしいほどに光り輝く精力的な40代の科学者ガリレイと地動説撤回後の晩年の老いの姿の対比、そして寂寞とした心的状況は、この芝居が問いかける現代科学者論について考える以前に、一人の科学者の生涯として胸打たれるものがあった。



ベルリーナーアンサンブル公演冊子

この作品の中で、ガリレイは実験と観察に夢中になり、科学の将来を大衆に熱っぽく語る一方で、きわめて世俗的な学者として登場する。自分の給料の交渉をし、パトロンが求める実務に役立つ設計や計算もし、どこででも手にはいるような望遠鏡をパトロンに献呈して機嫌をとる。娘に嫁入り道具の一つもかってやりたい、物理学の本だけでなく本も沢山買いたい、いい食事もしたいのだと、彼は待遇の改善を求める。おいしいものを食べられる待遇が欲しいという（「おいしい食事の 때가一番よい考えが浮かぶ」というせりふに感じ入って、私はこれを人生訓としたために、愚かにも多くの病を得た）。

かって大学が「象牙の塔」としてあがめられ、特別視された時代があった。学者たちのいささか非常識な奇行も尊敬故に見過ごされた時代もあった。「象牙の塔」に生活するが故にストイックな科学への献身が求められたこともあった。その名残りはまだ社会の至る処に残っており、時として内外のからいわれのない非難の対象となっている。現代の学者にストイックな希求を求めても意味がないのだが、ガリレイの生活に示される世俗性こそ学者の人間としての、社会の構成員としての連帯感と信頼関係の基礎ではないだろうか。

ガリレイの登場の意義は何か。実験や観察の結果を率直に表現することが、権威や権力に対する脅威になる時代に入りつつあった、その時代の象徴である。哲学から実験科学へ、そのことの意義を彼は明確に自覚していた。コペルニクスや

ブルーノとの決定的な違いはそこにあった。コペルニクスたちは法王庁の教義理解や解釈権への挑戦として抹殺されるか、禁書の扱いを受けた。実験や観察はそれ自体が大衆との連帯を実現できる基礎であった。運動の法則は誰でも体験でき理解できた、天体も望遠鏡で覗けばその運行について経験的に理解できた。それだけに近代科学は誰に独占されるものでもない連帯性を基盤にした科学に発展する可能性を秘めていた。それだけに知識のとその解釈の独占を保持しようとする支配層にとって大きな脅威ではなかったのか。それだけにガリレイの屈服はまぎれもない裏切りであった。

法王庁の監視下で生きる師に敬意を表するために訪ねたかつての愛弟子アンドレアは、ガリレイが『新科学対話』を密かに書き進め、完成していたことを知り驚愕する。師の屈服は見せかけで、自分の学説をまもるための巧みな戦略であり、新しい研究倫理の実践だったのではと、師に対する評価を変える。ガリレイは、屈服したのは拷問が怖かったから、肉体的苦痛が怖かったからだと答える。屈服は計画的なものではなかったと答える。自分は科学に対する「裏切り者」であることには変わりはないといいきるのだ。学者としての「見栄」がコピーを隠滅することを躊躇させたのだと述懐する。

それにもかかわらずガリレオが屈服の過去への悔恨の念をにじませながら、自分が挫折によって学んだ教訓を愛弟子に伝えるくだりを、私は涙なしに読むことができない。アンドレアはすでに学者として自立し、ガリレイが求めてしたものとはまったく異質の学者として生きている。あらためて師の学問論、科学者に傾倒することなどあり得ないように思われる。それでもなお語らなければならないという、内面の葛藤に心打たれるのだ。

私、さらには私と同世代に人の多くは、それがいかに挫折と誤謬にまみれた体験であったとしても、戦争反対、安保闘争、大学の自治と研究の自由をまもる運動は科学者の人類的責務であると考えていた。いささか時代がかった表現だが、それが科学者の「魂」であると考えていた。その体験がこれほどまでに完璧に継承されず、学会や個別担当科目に逃げ込み、産官学協同は科学研究の内だとうそぶく輩ばかりが多くなってしまったのだろうか。あらゆる研究は普遍的人類的なものである筈なのに、なぜ科学の名において矮小化し、特定の利益集団や短期的視野の利害に奉仕する試みが横行するのだろうか。

ブレヒトはガリレイを通して、科学の目的は人類が生きてゆく労苦を軽減することだと断言する。今は言われると何でもする小才のきいた輩が輩出し、人類の労苦の軽減とは正反対の結果を生み出しかねない研究が進んでいると警告する。アンドレアからはこれに明確な答えは返ってこない。彼はすでに師とはまったく違った科学世界に生きているのだから当然であろう。

今の時代にブレヒトのように主張するならば、若い研究者からは老人の繰り言として片付けられ、「ださい」と無視されるだろう。しかし、ブレヒトがあの時代に流れに抗して書いたことは正しかったし、いまの時代にもこのテーマは至る処で語られなければならないと思う。ブレヒトは讃えられてあれ。今年はそのブレヒト没後50年の記念の年である。この年に、この時代に人は彼からあらためて何を学ぶのだろうか。

付記 岩淵達治によると、『ガリレイの生涯』は1958年3月末に千田是也の訳、演出、青年劇場によって俳優座劇場で上演された。この上演には「戦時中の偽装転向という問題関連性から関心が寄せられた」。私が大学院時代の仙台で観た上演はこれだったようだ。ガリレイの屈服に対する千田の解釈がどのようなものだったのかについて確認していないが、私自身の観劇の印象とあまり違ってはいないと推測する。ベルトルト・ブレヒト作、岩淵達治訳『ガリレイの生涯』岩波文庫、1979年、「訳者あとがき」308ページ。

書評・紹介

自著を語る

フリードリヒ・シュミット＝ブレーク / 佐々木建編、花房恵子訳 『エコリユックサック - 環境負荷を示すもう一つの「重さ」 - 』



「資源生産性」「資源効率」のコンセプトは、地球環境に対する負荷を削減する最重要の視点として産業界だけでなく行政でも定着しはじめている。ところが、そのコンセプトの理解のされ方をみると、ゆりかごから墓場まで（資源採取から製品の最終廃棄まで）、あるいはゆりかごからゆりかごまで（資源採取から製品のリサイクルまで）の全ライフサイクルで捉えきるものとしては理解されていないように思われる。原料の海外依存度の高い日本の場合、環境負荷の最大の部分は国外で原料採取と半製品加工、運搬の過程で発生し、原料産出国に残される。原料を出発点として環境負荷を産出するのは不十分と言わざるを得ない。

リサイクルでも、その過程で発生する追加的な環境負荷を十分に考慮に入れられていないことが多い。

資源生産性を「エコリユックサック」の視点で捉えることの意義はここにある。

どのような財やサービスでも思い環境負荷を背負っている。「エコリュックサック」は物財やサービスの産出に関わった物質総量で示され、そのそれぞれの地球環境に対する負荷を示すコンセプトである。物質消費をその根っこのところから削減する視点こそがいま地球環境問題に求められているのではないか。地球温暖化に関わってエネルギー消費の削減が叫ばれているが、生産と消費の過程での省エネ対策では限界がある。エネルギー消費の少ない物質を選択すれば、省エネルギーはさらに促進されるはずだ。

このコンセプトは畏友シュミット＝ブレークが世に送り出したものだ。その日本語訳語を考案したのは私である。「エコロジカル・リュックサック」あるいは「環境リュックサック」も考えたが、普及と定着のためには簡単な方がよいと思い、この表現を選択した。私の世代にとってはリュックサックは大抵は登山用で、重い荷物を運搬する道具であった。戦後の買い出しや闇物資の搬送にも重要な役割を果たしたことも思い出される。ところが、今の世代にとってはリュックサックは日常に利用される軽いもので、その重さを感覚で理解してもらえないのではないかという心配もあった。そういう意味では、あまりよい訳語ではなかったかもしれない。それだけになんとか定着させたいという思いがつのる。

シュミット＝ブレークによって新たに編まれた書物（Friedrich Schmidt-Bleek (Hrsg.), *Der ökologische Rucksack. Wirtschaft für eine Zukunft mit Zukunft*, Stuttgart/Leipzig 2004）の紹介を思いついた理由の一つは、そのあたりにもある。本書はフィンランド、オーストリアでの企業や組織の体験を収集した実例集であるが、普及を願って解説書の体裁に再編集し、序文をあらたに書き下ろした。

再編集の問題点、欠陥がどこにあるかについては、私自身がよく承知している。シュミット＝ブレークによる原著序文では、資源生産性と産業政策のあり方について重要な指摘がなされている。資源・エネルギー生産性はヨーロッパでは、企業の環境対応の課題であるだけでなく、産業政策の重要なキーワードになりつつある。日本の現状を観察すると、企業経営の次元では一部の企業で資源生産性向上がようやく重要課題と自覚されるようになってはきたが、定着にはほど遠い。入門書として再編集したため、原著のねらいは曖昧になってしまった。資源生産性が路線選択にとって持つ意義、そこに示される二つの道については、あらためて世に問いたいと思う。（財団法人省エネルギーセンター、2006年2月、314ページ、1900円）

短信

京都のこの夏は最高気温が連日35度を超え、ことのほか厳しく私の心身を責め立てた。この暑さは加齢による体力の衰えを反映しているのか、それとも温暖化とヒートアイランドのせいなのか。おそらく後者によるものであろう。この夏をさらに耐え難いものにし、時に意気消沈させたのは、「靖国」をめぐる論議とレバノン戦争であった。意見表明の機会も抵抗の機会も与えられないでテレビ映像の前で一人批評に満足しているかのような自分を恥じた。レバノン国民に対する無差別爆撃がもたらした惨禍は61年前のあの夏にアメリカ軍の無差別爆撃に逃げまどったこと、焦土に立って多くの死に直面したあの日のひりつくような「熱」を生々しく思い起こした。通学用ズック靴の薄いゴム底（ゴムは最重要軍需部物資だったから底もズックだったかもしれない）を通して伝わってきた異様な地熱はいまだに私の感性に留められている。

「ペルトルト・プレヒト『ガリレイの生涯』講」は、ウェブサイト「私の大学」をテーマに連載しているシリーズの一部である。プレヒト没後50年の記念の年でもあり、ここに再録した。プレヒトの言う「ガリレイの裏切り」の悲喜劇は今も広く深く続いている。8月の国際天文学連合を舞台にした冥王星騒動にも「裏切り」の匂いがしたが、同じ8月にポアンカレ予想を解いた仕事でフィールズ賞に推薦されたロシアの数学者グレゴリー・ペルレマン氏が受賞を辞退した。自分の解が証明されただけで十分という辞退の弁に爽快感を覚えた。

ドイツのノーベル文学賞受賞者 G・グラスが最近出版された自伝の中で戦争の最終段階で17歳でナチ武装親衛隊に入隊していたことを明らかにした。彼自身に対する激しい非難を含めて論議を巻き起こしている。隠していたことが問題とされているのだ。ノーベル賞を返上せよとの極論さえある。私はこのドイツ人特有の潔癖さが生み出すこのような徹底性に少々違和感を覚える（もちろんそういうからといって日本で流行る過去の公的活動を隠蔽したり曖昧にしたりするやり方を是認するわけではない）。彼は自覚的に政治的決断をして参加したわけではない。17歳の少年が崩壊が時間の問題となったナチ体制の維持にかり出されたのである。少年期の戦争体験は心の奥深くに滲んでいる。それが突然心底から現れたことに対して、その時代を体験しない人びとにそれを適切な時期に表現しなかったこととして徹底的に批判する権利はあるのだろうか。このことでグラスのような優れた知識人の影響力が弱められるのにはなんともやりきれない。

2006年3月末に大学を定年退職し、あこがれのフリーランスを目指す条件がようやく整った。当面はこの数年講義しながら考えていたことのまとめが中心となり、新しい仕事への取り組みはその先になる。いま取り組んでいるのは国際経済政策論で講義した内容を「資源・エネルギー問題と民主主義」「外国人問題と少子化社会」のテーマに整理する作業である。いずれウェブサイト上に公表し、満足できる水準に到達していると判断されるものなら、ワーキングペーパーとして活字にしたい。このような稚拙な内容のものを勝手に送りつけて読んでもらえるかどうか不安があるが、年3回程程度の発行を目指したい。希望の方には連絡いただければ送付するが、バックナンバーをPDFファイルにしてウェブサイトへ格納するので、そちらで読んでいただくという方法もある。これからもご指導、ご鞭撻のほどをよろしくお願ひしたい。